

大学出版

14
号
'92
春



大学出版部協会

Association
of
Japanese University
Presses

北海道大学図書刊行会

Hokkaido University Press

慶應通信

Keio Tsushin Co., Ltd.

産能大学出版部

The SANNO Institute of Management

玉川大学出版部

Tamagawa University Press

中央大学出版部

Chuo University Press

東海大学出版会

Tokai University Press

東京大学出版会

University of Tokyo Press

東京電機大学出版局

Tokyo Denki University Press

東京農業大学出版会

Tokyo University of Agriculture Press

東京理科大学出版会

Science University of Tokyo Press

法政大学出版局

Hosei University Press

放送大学教育振興会

The Society for the Promotion of
the University of the Air

明星大学出版部

Meisei University Press

早稲田大学出版部

Waseda University Press

名古屋大学出版会

The University of Nagoya Press

京都大学学術出版会

Kyoto University Press

大阪経済法科大学出版部

Osaka University of Economics and Law Press

関西大学出版部

Kansai University Press

九州大学出版会

Kyushu University Press

読書の周辺	
オリンピックの政治学	池井 優 1
シャリヴァリの行方	蔵持不三也 5
——文化生態学に寄せて	
●	
大学における営業の展開	池田 敏之 9
●	
大学出版部ニュース	
新案内'91・12'92・3	17 12
●	
製作の現場から	表 3

大学出版部協会マーク (表1) デザイン 道吉 剛

本小冊子中の表示価格は税込です。

第13回 (平成三年度) 日本生命財団出版助成図書 刊行期間

平成四年4月
平成五年3月

- ① 「米欧回覧実記」の学際的研究
田中 彰 (札幌学院大学経済学部教授・北海道大学名誉教授)
北海道大学図書刊行会 編
- ② 北海道の地すべり地形——分布図とその解説
高田誠二 (久米美術館研究員・北海道大学名誉教授)
北海道大学図書刊行会 編
- ③ 歯と骨をつくるアパタイトの化学
山岸宏光 (北海道立地下資源調査所環境地質部長)
編著
東海大学出版会
- ④ 近代化と伝統的民衆世界——転換期の民衆運動とその思想
岡崎正之 (大阪大学歯学部講師) 著
鶴巻孝雄 (町田市立自由民権資料館勤務) 著
東京大学出版会
- ⑤ 図集・日本都市史
高橋康夫 (京都大学工学部助教授)
吉田信之 (東京大学文学部助教授)
宮本雅明 (九州芸術工科大学芸術工学部助教授) 編
伊藤 毅 (東京大学工学部助手)
東京大学出版会
- ⑥ 阿蘇神社祭祀の研究
村崎真智子 (鎮西学園、真和中・高等学校教諭) 著
法政大学出版局
- ⑦ アトラス・水害地形分類図
大矢雅彦 (早稲田大学教育学部教授) 著
早稲田大学出版部
- ⑧ 近世俳諧史の基層——蕉風周辺と雑俳
鈴木勝忠 (中京大学文学部教授・岐阜大学名誉教授) 著
名古屋大学出版会
- ⑨ 福岡の民俗文化
佐々木哲哉 (田川市石炭資料館館長) 著
九州大学出版会

* 日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行なっている (既刊130点)

オリンピックの政治学

池井 優

(慶應義塾大学法学部教授)

1

「平和の祭典」「スポーツの祭典」オリンピックが政治と深く関わっていることを、われわれにいやというほど認識させたのは、一九八〇年のモスクワ大会をアメリカ合衆国の呼びかけによって、日本、西ドイツをはじめ六六ヶ国が「ボイコット」したことであった。近代オリンピックの創始者クーベルタン男爵の有名な言葉「オリンピックは参加することに意義がある。勝敗は問題ではない」に反して、「オリンピックは参加しないことに政治的意義を見出す」ことになってしまったのである。さらにソ連が、報復措置として四年後の八四年ロサンゼルスで行われたオリンピックを、アメリカ合衆国でソ連、東欧の選手に亡命を呼びかける動きがあり「選手・役員が安全が保障されない」こと

を理由に、東欧諸国にも呼びかけて不参加を表明。ことこれに至って、五輪大会は四輪、あるいは三輪大会と墮してしまった。

かねてから私は、野球をはじめスポーツは見ることもプレーすることも好きだったため、スポーツと政治とのこの結び付きに非常に興味を覚えるようになった。そして一九八三年、慶應義塾創立一二五年を記念する論文集への寄稿を求められた際、「モスクワオリンピック、ボイコットの政治過程」を執筆した。まだボイコットから三年しか経過していなかったが、それだけに、国際オリンピック委員会（IOC）関係者がマスコミに発表した談話などもよく理解でき、日本体育協会とJOCがいかに日本政府の圧力と要請の下に不参加に追い込まれていったかが、手にとるよううにわかってきた。またこの時は、ボイコット呼びかけの主導者となった、当時のアメリカ合衆国大統領ジミー・カーターの回顧録、同じく当時の日本の外相であった大来佐武郎の『エコノミスト外相の二二五日』といった回顧録を使用することができたし、戦後のオリンピックと政治の結び付きを分析したりチャード・エスピー著『ザ・ポリティクス・オブ・オリンピックゲームス』（一九八一年・ユニバーシティ・オブ・カリフォルニア・プレス）に代表される秀れた研究書も利用することができた。

面白くなってきた私は、その後オリンピックと政治、特に日本との関係でテーマを探し始めた。そうした折、一橋大学の細谷千博教授が退官するにあたって学会の仲間達が記念論文集を贈ろうということになり、共通テーマが「戦間期の日本外交」と決められた。戦間期、すなわち第一次大戦と第二次大戦に挟まれた時期の日本外交のテーマといえば、ワシントン会議、ワシントン体制下の日中関係・日米関係、ロンドン海軍軍縮会議、満州事変、日中戦争などが思い浮かぶが、私は他の人々が全く目をつけていない面白いテーマはないかと模索した。そして偶然に、昭和十五年（一九四〇年）が紀元二六〇〇年にあたる機会に東京でオリンピックを開こうとの動きが起こり、一度開催地に決定したにもかかわらず、日中戦争の勃発などの事情によりそれを返上したという事実があることを知った。結果的にはこの一九四〇年のオリンピックは第二次大戦の勃発により開催されなかったのであるが、開催の予定されていた時期、第一二回オリンピック大会の東京招致実現への軌跡と日中戦争の勃発と進展によりやむなく開催地を返上するに至る過程は、追及してみる価値があると考えた。

幸いにも絶好の資料が東京ドーム内にある野球体育博物館に所蔵されていた。東京市役所編『第一二回オリンピック東京大会東京市報告書』（一九三九年・東京市）である。

開催されなかったオリンピックについて関係者が残したこの詳細な報告書をもとに、私はテーマを設定することにした。外務省外交史料館に所蔵されている外務省と出先機関との間で交わされた電報や、日本のＩＯＣ委員であった岸清一、杉村陽太郎、副島道正の伝記と回想録、『大日本体育協会史』等で周辺を固め、構想を練った。そうして、紀元二六〇〇年がらみのオリンピック東京招致運動の発端、一九四〇年の開催地が決定されるオスロでのＩＯＣ総会に向けて、対立候補で最有力視されていたイタリアのローマに辞退してもらおうべく、日本側がムッソリーニにはたらかせかけた時の経過、オスロ会議で結論が出なかったため、翌年のベルリンオリンピック直前に行われたベルリン総会で再度の説得がなされた時の状況、ＩＯＣ委員の賛成を得、ヘルシンキを押さえてついに開催地に決定したこと、について分析し、さらに、その後日中戦争が原因となって、列国から戦争当事国である日本での開催に対して疑問が表明されたり、戦争の進展に伴って競技場建設のための資材が不足したり、馬術競技への出場が予定されていた陸軍騎兵隊の軍人から辞退の意志表示がなされたりして、最終的に閣議における返上の決定がなされるまでの過程を追ったのである。

これまで等閑視されてきたオリンピック開催地をめぐる政治・外交過程研究に先鞭をつけたとして、この論文は学界でも好評であった。

これに気をよくして、次のテーマを探しはじめた。現在はアジア大会の名前で知られている極東選手権競技大会、通称東洋オリンピックの開催、特に参加国について興味深いテーマがみつかった。一九一三年、アメリカ合衆国の呼びかけによって、アジアの各国で隔年毎に東洋のオリンピック大会ともいふべき競技会を開催する案が実現した。日本、フィリピン、中国の三ヶ国で極東体育協会が組織され、第一回大会が一九一三年にマニラで行われた。第二回は上海、第三回は東京……と第九回までいろいろな問題をはらみながらも大会は開催されたが、第一〇回大会にいたって大問題が発生した。第一〇回大会は一九三四年五月にマニラでの開催が予定されていたが、一九三一年には満州事変が勃発していたのである。日本が満州事変のち傀儡国家「満州国」を成立させ、一九三二年九月にその承認にふみきったことは周知のとおりだが、問題は、マニラで行われる東洋オリンピックに「満州国」を参加させよという要求が、満州国体育協会及び日本の一部から出てきたことである。当時「満州国」は世界のほとんどの国が承認しておらず、また東洋オリンピックのメンバーである中国が「満州国」の加入及びその代表選手と試合をすることなど考えられもしなかった。新メンバーの加盟は満場一致でなければならぬという規約により、中国の反対によってそ

れは否決されたのだが、国別対抗の望みを断たれた満州国側は競技別対抗への参加を希望したり、オープン参加の可能性を探ったりした。そうした状況下で、日本国内にも「満州国」が不参加なら日本選手団は大会に参加すべきでないとの動きもあり、出発する選手の宿舎が右翼団体に襲われるといった不測の事態も発生した。不穏な空気の中で日本は大会参加を果たしたものの、マニラにおける総会では「満州国」問題をめぐって中国代表が退席、東洋体育連盟はついに瓦解するに至るのである。

このテーマは傀儡国家「満州国」が介在した特殊な例によるものであるが、オリンピックのミニ版ともいえる極東選手権大会をめぐっての内政と外交との関係は、今後の研究にひとつのケーススタディを呈示してくれるものでもあった。

4

第二次大戦前、オリンピックを最大限政治的に活用したのは、一九三六年のベルリン大会であった。当時のドイツはヒトラーを頂点とするナチス全盛時代であった。だがヒトラーは最初はオリンピック開催について消極的であった。一九三二年政権を奪取する前のヒトラーは、「オリンピックはユダヤ主義に汚れた芝居であり、国家社会主義の支配するドイツでは上演できないだろう。」とまでいていた。しかし一旦政権を獲得したヒトラーに対し、宣伝大

臣ゲッペルスは、「首都ベルリンでオリンピックを開催することは、ナチスドイツの威容を全世界に伝える絶好のチャンスであり、またドイツ国民のナシヨナリズムをかきたてる最高の手段となる」と説得。ヒトラーの決断によってオリンピックの準備が一変した。総統の責任により国家的な事業となったのである。一〇万人収容の大スタジアム、一万六〇〇〇の観客席を持つ水泳競技場、体育館、ヨット、ボートのための艇庫やスタンドが、次々と新設され、選手村の準備も各国の実情に合うように整えた。オリンピックの鐘が用意され聖火リレーのプランが練られた。ギリシャの古代競技場で点火した火を、ベルリンにまで運ぶ聖火リレーは、コース調査に名を借りた軍の専門家がヨーロッパ各地に出張。調査結果は後にナチスドイツがヨーロッパ諸国を侵略する際の有力な情報になったという。

またドイツはオリンピックの開催地を内外に宣伝する方法を考えた。宣伝はドイツ中央観光局が担当し、海外四〇ヶ国、四四ヶ所に事務所を設置。オリンピック宣伝用パンフレットが一三ヶ国語で印刷され、世界中にばらまかれた。オリンピック用のポスターも、一九ヶ国語で印刷され、世界各国に送られた。

悪名高きナチスのユダヤ人迫害も、オリンピックの開催中は、反ユダヤの立て看板が街角から消え、ユダヤ人選手をドイツチームの一員に加えることさえやった。こうしたドイツの「配慮」と万全の準備に各国から参加

した選手と役員、取材に訪れた報道陣は、表面的な華やかさに心を奪われ、ドイツ側の宣伝にのせられる形でベルリン大会の光の部分のみを報道したのである。

特に日本はベルリン大会開催の直前に次の大会開催地が東京に決定したこともあり、国をあげてのドイツの取り組み方に、好意を持って接し、結果的にゲッペルスの意図した宣伝に踊らされることとなった。

5

四年前のソウル大会は、分断国家韓国での開催とあって、これを危険視する向きも多かった。「北」によるテロの恐怖や、ソ連、東欧の諸国が、承認していない国家でのオリンピックに果たして選手を送ってくるかなどについて、いくつかの疑問が出された。しかし結果的にはこれは大成功に終わった。

それにしても、そうした問題のなかったわが国の立候補地名古屋が、何故に開催地になり得なかったのか？ ソウルの勝利は、八八年開催予定の大会の開催都市を決める一九八一年のIOC総会に的をしぼった作戦の結果であった。総会が開かれる直前の一〇日間に集中して、韓国はバーデンバーデンに集ったIOC委員の説得に全力を傾けたのである。

今夏、バルセロナ大会に合わせて『オリンピックの政治学』（丸善ライブラリー）を刊行する予定である。

シヤリヴァリの行方

— 文化生態学に寄せて

蔵持不三也

(早稲田大学人間科学部教授)

I

今は亡き五味康祐の作品に『薄櫻記』というのがある。

もともとは新聞の連載小説だったもので、主人公は中山(堀部)安兵衛とのちに吉良の用人となる丹下典膳(左膳)。物語は、安兵衛の上京から始まり、途中に典膳の妻の姦通事件などを織り込みながら、最後に吉良邸討ち入りにおける両主人公の対決でクライマックスを迎える。だが、ここではその筋書きは措き、ある一節だけに注目したい。場面は、安兵衛が内職の世話になっている商家の娘と出会ったところ。密かに想いを寄せている安兵衛に、どこに行ってきたかと尋ねられた娘は、頬を赤らめて「親戚の騒動打ちに」と答えている。はたして、この「騒動(後妻打ち)」とは何なのか。五味はそれをこう説明している――。

「女騒動」というのは、もとは武家から起こった「後妻打ち」のことで、先妻を離縁して間もなく新妻を呼入れた場合――十日とか、二十日とか、乃至一カ月ぐらいで直ぐ次の女房を貰った場合に、前の女房は自分の親戚や一族の者を呼び集めて相談をする。そうしてその儘にしておけぬということになると、一家一門のほかにも達者な若い女を狩集めて、同勢が二三十人……になると、日取りを定め、前妻は自分の家来を使い立てて、御覚えがおりのことと思うが、何月何日に騒動に参る、という口上を新妻に申送る。

新妻方でも家来を取次にして、
「ごもつとも次第であるから、心得て御待受け致します」

と返事をする。中には何分の御詫びを申すから、どうか御見合わせを願う度いと、あやまるのもあったらしい。併しそんな弱いことでは一生の恥辱になるので、大概は申込みを受けた。

(『五味康祐代表作集』第八巻、新潮社)

いささか長い引用となつてしまつたが、五味によると、こうして押し掛けた女たちは、相手の家に乱入して散々暴れ回る。だが、それで能事足れりとはならない。「時刻を見はからい、新妻の仲人をした者と、先妻の待女郎(婚禮の

時に花嫁に付添う侍女)をした者とが出合つて、仲裁の勞をとる」というのだ。その限りにおいて、「後妻打ち」とは、一連の示威行為のあとの和解に収斂点をもっていることとなる。つまり、排除と同化とを共存させた行為となるのだ。

II

このような「後妻打ち」が実際にあったとして、いったいつ頃から行われるようになったのか、筆者は寡聞にして知らない。むしろ、明治期以降には、各地で若者組による「踊り込み」といった類似慣行が頻(散?)発するようになるが、興味深いことに、同種の民俗慣行は、実は中世から今世紀初頭まで、ヨーロッパでもみられた。《シャリヴァリ》と総称されるものがそれである。

この慣行は、いったいに若者を中心とする住民が、共同的規範に対する違反者、つまり地域内の再婚者、とくに親子ほど年齢差のある不自然な再婚をしようとする者のみならず、姦通者、囃天下ないし妻に打擲された亭主などをも制裁の対象として営まれた。ここでは、太鼓やトランペットといった正統楽器に加えて、鍋や釜、ドラム缶などによる雑音楽が奏でられたことから、これを民俗語彙でラフ・ミュージックともいう。

もとより若者たちを主体とする慣行。単なる演奏だけのことはずまず、当事者は哀れにもロバに後ろ向きに乗せら

れて通りを引き回されたり、模擬裁判で有罪を宣告された後、自分に似せて作られた藁人形を焼かれたり、時には「後妻打ち」よろしく、シャリヴァリ参加者たちに家中破壊されたりもした。彼らの乱暴狼藉で、しばしば怪我人(や死者)も出た。ただ、参加者に《シャリヴァリ税》という名の和解金ないし酒を差し出せば、被害をほとんど受けずにすんだ。

昨年十月、筆者は年来のテーマであったこの民俗慣行を、彼の地の民衆文化との関わりにおいて縷々検討し、ようやく単行本にまとめることができた(『シャリヴァリ——民衆文化の修辭学』同文館)。むしろそれには、歴史学者のナタリー・Z・デーヴィスやJ・ル・コブ、あるいは民俗学者のニコル・ベルモンなどの研究が重要な示唆を与えてくれたのだが、その多くはシャリヴァリをネガティブな、あるいは無法な民衆運動ととらえてしまっている。つまり、排除と加虐の側面を強く打ち出すことによつて、それが本来的に有していたであろう同化と受容の側面を捨象しているのだ。

筆者はそこから出立した。事件化して裁判沙汰となり、結果的に記録化された事例のみを根拠とする歴史学の方法論とは一線を画し、おそらくそれよりはるかに多いと推測される、円満に收拾されたシャリヴァリの存在に目を向けた。なぜ、《シャリヴァリ税》なるものがあるのか。そして、規範違反者があくまで地域社会の一員である以上、そ

の税を拒むことによって引き起こされる悲劇と、さほどの負担とはならない税を支払うことによって得られる安寧とのバランス・シートは、容易に理解できたのではない。さらに、シャリヴァリが教会や司法当局の再三にわたる禁令にもかかわらず、ついに消滅しなかった理由は何か。

まことに単純な疑問である。だが、まさにこの単純な疑問こそが、シャリヴァリ像の歴史的・文化的性格を再構築する上で、決定的な手掛かりとなる。そのところを見据えながら、シャリヴァリを筆者自らが標榜する《文化生態学》の事例として再検討したらどうなるか。拙著を上梓した意図がここにある。

III

まず、文化生態学 (Science of Eco-Culture) とは、従来の文化理論にみられるような、当該社会における文化要素をばらばらに切り離された形で追究するのではなく、それらを一種の社会的・総体的ネットワークの構成素として互いに関連させつつ、人間・社会と文化の関わりを、通時的かつ共時的レベルにおいて解読しようとするものである。

そこでは、人間の物質的・精神的 (再) 生産行為から流通・分配・消費行為までもが、それぞれに社会の固有の言説と記憶とを有する、すぐれてエコロジックな情報としてとらえられる。これらの情報が、自然の生態系

と同じように、相互的に連鎖系の中に組み込まれているからだ。

それゆえ、しかじかの技術や生業、交換、祝祭、造形、遊戯、疾病、食生、世界観、価値観などといった情報は、ひとたび社会的に定立すれば、ただちに文化の参照系として暗黙裡に制度化され、一種の規範となって人間とその生活を規定ないし規制するようになる。逆に言えば、人間はこうした情報によって社会的存在としての自己を表現し、同時に社会自体を表現する。文化の生態系 (エコロカルチャー) を自ら演じるのだ。

シャリヴァリをこのようなエコロカルチャーの一要素ととらえる。詳細は拙著をみていただくほかないが、それは近代の法では裁けぬ共同体の規範違反者たちを、もう一つ



愚者の祭りにおけるシャリヴァリ
 (『フォーヴェル物語』より、
 パリ国立図書館蔵)

の規範（―掟）として裁く。裁きながら、一方で一種の通過儀礼として彼らを地域社会に再び受け入れ、他方で規範の存在を強調しつつ、地域住民の記憶と警戒と呼び覚ます禁忌の情報として、その日常を規制する。

また、シャリヴァリにおいて、しばしば評判芳しからぬ者が犠牲者となったことに着目すれば、仕掛ける側と仕掛けられる側との間の、日常生活の中では容易に見えてこない精神的・物理的關係もが炙り出される。いわばシャリヴァリは、当該社会の構造化された不可視の情報を明るみに出し、それをマス・カタルシスのレベルで表現する社会的装置でもあるのだ。

IV

歴史的にみて、シャリヴァリは、しかしこうした集団的監視装置としてのみあつたわけではない。たとえば、そのラフ・ミュージックや藁人形の焼殺は、カルナヴァルを構成する祝祭要素と共通している。だからこそシャリヴァリは、地域の重要な祝祭として営まれただけでなく、時には、ミハイル・バフチンがつとに指摘するように、すぐれて記号化されにバーレスク・パフォーマンスとして、もともとは目的や性格を異にするカルナヴァルに組み込まれたものだ。

そして、何よりも忘れてならないのは、シャリヴァリが近代の民衆に言語を与えたということである。権力者や為

政者に対する反抗の言語を、である。たとえば、フランス革命や三月革命（ウィーン）において、民衆は手にした「雑音楽器」を奏でながら、口々に《シャリヴァリだ！》と叫んで行進したのではなかったか。そんな彼らにとつて、シャリヴァリは過たず反抗のメトロロジイすら提供したのだ。

さまざまな禁令や圧力をかいくぐって、シャリヴァリが永らえた最大の理由は、おそらくそれが担いえたこうした社会的メカニズムにある。つまり、エコ・カルチャーとして民衆の行動規範となっていたことにあるのだ。

たしかにこの慣行は、観光化されたものを除いて、今世紀初頭に消滅した。それは、結果的に地域社会の集団的監視機構（ミッシェル・フーコー）が崩壊したことを過不足なく物語る。しかし、現在でもなお、たとえばヨーロッパの農民たちは、鍋・釜や農具を叩きながら農産物の輸入反対のデモをしている。これをしもシャリヴァリの復権というべきかどうか、即断はしかねるが、歴史の深層をゆるやかに、だが確実に流れるエコ・カルチャーの記憶。筆者が「歴史の遺伝子」と呼び、文化生態学の格好の対象となりうるその記憶は、どうやら小説の現実よりはるかに如実な現実として、歴史に向き合うわれわれの姿勢に大きな問いを突き付けるはずだ。《歴史のリアリティーとは何か》という問いを、である。

大学における営業の展開

池田 敏之

(紀伊國屋書店専務取締役・営業総本部長)

1 大学市場の伸長

昭和六〇年代に入り、第二次ベビーブームに伴う進学人口が増加し、大学市場は大きく、幅広く伸長した。第一次ベビーブームに依る大学進学人口の増加は昭和三九〜四二年にかけて起り、大学一一三校、短期大学一四三校が新設され、大学市場が大きく発展した。今回の第二次ベビーブームによる新しい大学、短期大学は、以下の如く増加した。

	昭和六〇年現在	平成四年現在
大学	四五八校	五一九校
内訳	国立 九五	九六
	公立 三二	三九
	私立 三三一	三八四
短期大学	五三五校	五九九校

この七年間に大学は六一大学、短期大学は六四短期大学が新設され、一一一八校の新しい高等教育機関が整備された。

このため、大学市場は空前の好景気を示し、多数の学術専門図書が各大学、短期大学図書館に納入された。

2 図書購入費の動き

図書購入費は、この大学市場の伸長に伴い、どう増加していったかが以下の数値で捕えることができる。

内訳	国立	公立	私立
国立大学	四一	四一	四一
公立	四八	五四	五四
私立	四四六	五〇四	五〇四
昭和六一年(一九八六)			
平成二年(一九九〇)			
国立大学	八九億八二〇〇万	九二億九四〇〇万	

公立大学	一一億一〇〇〇万	一二億一三〇〇万
私立大学	一八九億四八〇〇万	二一九億四一〇〇万
短期大学	一一億一九〇〇万	三五億八一〇〇万
計	三二二億五九〇〇万	三六〇億二九〇〇万

この五年間で、図書購入費は四七億七〇〇〇万増加され、年平均九億五四〇〇万ずつ購入予算が上昇したこととなる。この大半が私立大学及び短期大学の新設によるものであり、大学市場が活発に伸長していることを示している。

この図書購入費を大学短期大学一校平均で算出すると以下の通り。

国立大学	九六八一万
公立大学	三一一〇万
私立大学	五七一三万
短期大学	五八九万

3 平成四年度予算の動き

平成四年度の文部省予算は間もなく国会で承認可決されるが、今年度は明るい材料が多い。

特に私立学校関係助成費予算案では、七二億二八〇〇万が増加され、三五四〇億二六八七万が決定された。この中で、(1)私立大学大学院等教育研究及び、(2)私立大学研究設

備整備関連の予算が、大学院八四億五〇〇〇万、大学二三億五三三六万と、それぞれ三億ずつ前年を上廻り補助されたことは、今年度は、大型図書及び設備等の購入が活発化されるものと期待したい。

一方、国立大学に関しても、大学院を中心に以下の予算が増加された。

高度化推進特別経費

五〇億三二〇〇万(前年 ゼロ)

研究科専攻新設設備

一二億八三〇〇万(前年 九億四一〇〇万)

大学院最先端設備充実

四九億三七〇〇万(前年四三億七五〇〇万)

計 一一二億五一〇〇万

前年に比べ、五九億三五〇〇万の予算が増加されたこととなる。この結果、今年以降、国立・私立大学大学院博士課程を有する大学へは、重点予算が配分され、研究資料や設備の購入が、より大きく多くなるものと予測される。

4 大学市場への営業活動の現状

第二次の大学や短大の新設・増設ブームにより、大学市場は非常に活発な営業活動を推進してきた。

しかし今、徐々にであるが業務内容が高度化し、多様化

し、専門化し、二五年前の第一次ブームと異なり、図書のみ納入では業務が完了出来ぬ時代に到っている。

特に図書館のコンピュータ導入に伴い、カードレス図書館が増加しつつあり、電算処理に依りデータベースの作製、ニューメディア商品の取扱比が年々上昇してきている点である。

我々営業総本部での各品目別年代別取扱比を参照すると、以下の如くなる。

	昭和六一年	平成三年
書籍	六三%	五五%
雑誌	二九%	二七%
その他	八%	一八%

この六年間に書籍・雑誌以外のニューメディア商品、教育設備関連商品、データベース製作、文献検索の需要が急上昇し、取扱比率を高め取引高を上昇せしめた。一方、書籍・雑誌のこの六年間の成長率一四三%と、これも年平均七%の上昇を示しており、印刷物商品とニューメディア商品とは並行して取扱いを増しているといえる。

このため、我々の営業活動は単に情報提供、商品の迅速な納入のみでなく、ニューメディア商品のソフト・ハードの販売、アフターサービス、使用方法の技術指導等、多岐にわたる業務が増えており、組織の中に専門職を養成しつ

つ、より効果的、効率的営業をすすめていく必要が生じている。

5 今後の対策

出版の形態は、活版印刷→コンピュータ印刷へ移行し、更に紙の文化より、音、映像、光の文化へ移り変わりつつある。この中で我々書店の営業は、やはり現実を直視し、ユーザーの求める形態での商品提供、情報提供をすすめていくこととなる。このため、営業は必然的にマルチ型営業をすすめていくこととなり、営業マンの資質の向上、技術の向上が求められる時代に入った。

一方、営業経費は年々高騰しており、利益の残る営業をすすめながら、変わりゆく現実と対応せざるを得ない。従って今後の営業対策は市場を選び、ユーザーの求める商品を選び、一人一人の戦力資質を向上させつつ、社会に役立つ書店営業を目指さねばならない。

大学出版部協会の各大学出版物は、当面、新しい時代の影響は少ないが、企画、形態、数量、価格運営等々については、今後よりシビアに現実の変化を捕え、ユーザーのニーズを捕え、より大きく発展成長されんことを願っております。

我々は、この出版物の普及のために全面的協力を惜しまず、共に歩み、友に学びつつ、共に向上を期していきたいと思えます。

北海道大学図書刊行会

■急峻なグレンデを鮮やかなシニョールを描いて滑走する華麗なフォームには、スポーツスキークーとしての百年の歴史が凝縮されている。中浦皓至著『スキー技術の歴史と系統』(二八八四円)は、滑降と回転をめぐる技術論争の歴史を、十年かけてまとめた力作。八時間でパラレルが習得できる合理的な練習法が、

大学出版部ニュース

産能大学出版部

▼板橋興宗著『心豊かに生きる知恵』本書は、曹洞宗大乗寺の住職で専門僧堂長である著者が人間として仕事や人生をどう捉え、直面する問題や悩みをいかに克服し生きるべきかを説く。
▼北岡俊明著『本田宗一郎の経営学』では、生涯を通じて経営

研究と実践の集大成として提唱されている。本格派スキー技術書として好評で、たちまち重版

■ニホンカモシカは日本唯一の野生ウシ科哺乳類として、特別天然記念物に指定されている。杉村誠・鈴木義孝著『ニホンカモシカの解剖図説』(一四四二〇円)は、二千頭にのぼる解剖研究に基づき、全身にわたる精密な解剖図と計測値を収録。今後の保護研究の基本文献として不可欠の労作といえよう。

のパラダイムシフトを行い続けた本田宗一郎の生きざまを描きつつ、その世界性と普遍性をもった経営哲学を中心に新しい視点で捉えている。バブル経済崩壊後の企業経営にとって、真の経営のあり方、世界に適用する企業とは何かの指針となる。
▼青木シゲル著『パソコンデーター活用法』は、市販のパソコンソフトをさらに有効活用するためのデーター互換法を中心にまとめた実用ノウハウ集である。

慶應通信

▼川合隆男編著『近代日本社会調査史(Ⅱ)』(定価三五〇二元)が、好評の既刊(Ⅰ)(明治期)に続いて刊行された。社会調査は人々が相互に理解を深めるためのコミュニケーション過程であるというユニークな視点から、近代の様々な調査活動の実態を明らかにしてゆくのがこのシリーズの特色である。(Ⅱ)がカバ

玉川大学出版部

◆岡田喜秋『歴史のなかの旅人たち』定価二二六六円

旅をすることがごくふつうのことになったのは、今世紀も後半に入ってからである。歴史的にみて、旅はどういう動機で行われ、その目的は何だったのか。古代フェニキア人の旅から前世紀の客船による団体旅行まで、時代とともに移り変わってきた

している大正期は近代日本の歴史像・生活像が大きく変容した時期であるとともに、社会調査の展開期でもあり、扱われている対象は壮丁教育調査から今和次郎による民家調査まで幅広くい。▼渡辺國廣編『経済史叢92』(定価四七〇〇円)が編者の定年退職を記念して刊行。編者は「いい仕事」の場の提供を念じたというが、寄せられた論文もそれに応えて力作揃いである。斯波照雄「ハンザ商人考」他。

旅の様相と民族の交流を探る。
◆小川信夫『親に見えない子どもの世界』定価一八五四円

物質的に豊かになり、教育に熱心な親が増えつつける一方、学校の中で家庭の中で、子どもが冷え切ってきている。この中で叫び懸命に訴えかけている子ども、その背景に傾けることから、その背景にひそむ家庭、学校、社会の問題にアプローチし、今、大人がとるべき態度を考える。

中央大学出版部

▼J・ガルトウング／高柳先男
他訳『構造的暴力と平和』（定価二四七二円）

平和の問題を第三世界に於る貧困、人権抑圧、人種差別など国内外の社会構造に帰せられる構造的暴力との関係で捉え、戦争がなくても平和でない現代世界の病理とそのメカニズムを解明
▼水野朝夫著『日本の失業行動』

（定価六一八〇円）

失業の水準と構造ならびに変動のメカニズムを新しい分析手法により総合的に解明し、日本の労働市場機能の特質を問う。

▼斎藤道彦著『五・四運動の虚像と実像―一九一九年五月四日北京―』（定価三〇九〇円）

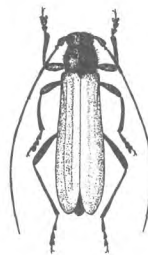
中国近現代史の画期とされる五・四運動に関する多くの資料を再検討し、従来の定説が虚像であったことを追求して、その実態解明に迫る問題提起の書。

東海大学出版会

『日本産カミキリムシ検索図説』大林延夫・佐藤正孝・小島圭三編3月刊行。日本に生息するカミキリムシ890種（含亜種）を収録。B5版・708頁・一八五四〇円

カミキリムシの系統学的研究は、他の甲虫類にみられない多様性と、生態と関連した平行進化による類似や相違、交差関連

性が複雑に形態に表現されており、大変難しいとされていた。本書は、第一線の研究者により、成虫、幼虫、蛹の図解検索を使って、たやすく種の同定ができるよう構成されている。研究者には待望の書である。



東京大学出版会

気象学は古くからある古典的学問で、日常生活の必要と、自然に対する驚きのなかで育まれてきた。この気象学が、コンピュータや人工衛星を駆使した「大気科学」の時代を迎え、「数値天気予報」の精度も向上した。

一方、人間活動による気象・気候の変化は、今世紀の新しくかつ最大の課題であり、気象学

者がそれに応えうるかが大きな関心事である。

東京電機大学出版局

『気象の教室』は東大教授の浅井富雄・松野太郎編集により、こういう状況下の最新の知見を誰にもわかるように各方面の気象学者が講義する新しい古典ともいえるべきシリーズである。1 グローバル気象学（既刊）、2 ローカル気象学、3 水の気象学、4 風の気象学、5 気象の数値シミュレーション、6 気象情報の学び方（全6巻、隔月刊）

資源の枯渇化や地球環境の悪化に対する危機感から、省エネルギーやエコロジー活動に対し、市民運動の枠を超えて、企業も本格的な取り組みを始めている。特に自動車業界にとっては石油燃料や環境破壊の点から最優先課題となっている。また出版界も「地球にやさしい生活」をテーマに身近な環境保護のやり

方を紹介する本から、本に再生紙を利用するなど、様々なかわり方をしている。

東京農業大学出版会

◆『畑作営農集団の展開過程―北海道南網走営農集団の実証的研究』

本書でとりあげた事例は、北海道の道東に大規模機械化畑作農業を生産組織によって展開している『南網走営農集団』である。東京農業大学の『網走寒冷地農場』も、その構成メンバーの一員でもある。

著者は本書のはしがきの中で次のように述べている。

今回は、生産組織の事例のなかでも農業基本法が制定された当時から歴史と経験を積んで地域的な広がりをもって形成・発展してきたいる先進的事例を通して実証的な立場から生産組織の展開メカニズムを明らかにしようと試みた。としている。

営農集団の発展原理、展開条件、営農集団の発展と経済評価等々が論じられている。

東京理科大学出版会

月刊誌「SUT」は、東京理

科大の英文名の頭文字で、理科大における中堅研究者の諸先生の熱心な編集にかかり、卒業生の業績をも多数紹介し、学生にはその進むべき方向に多くの示唆を与えるべく苦心している。これからの号に次のようなものを掲載したい。

○水中の微小生物

○固体地球科学へのいざないとその周辺

○地震余知へのアプローチ

○南極ペネトレータの開発

○巨大物理学の現状と今後の課題

○人間関係特集

○酸素と道づれ

○修士学生の生活と意見

定価四五〇円・送料五六円

年間購読十二冊五一五〇円

大学出版部ニュース

法政大学出版局

R・アイズラー著／野島秀勝訳『聖杯と剣』四六判三六〇五円

▼壮大な文明史の記述である。先史時代に強烈な光をあて、歴史時代を縦横に疾駆し、ほとんど百八百度転換の読みかえを敢行している。その行きつくところ、現代の危機的地球環境を診断し、人類の未来における可能性の予告にまで及ぶ。

：「ダーウィンの〈種の起源〉以来のもっとも重要な著作」という讃辞を博するものも、またむべなるかなである。

：人類の過去を総点検し、女性と男性の歴史の全体像について広大な知の拡充をはたそうとして試みられた、前人未到の壮挙；いつの日かルース・ベネディクトの「菊と刀」とならんで、われわれの記憶にさらにつよく刻みつけられることになるであろう。毎日新聞・山折哲雄氏評

放送大学教育振興会

▼今春の新刊六十三点と重版九十五点をいっせいに刊行。放送大学の放送エリア内だけでなくビデオ学習センター（全国十か所に設置されて学生数も増大）の地域など、三月には全国のマナビストの手に届いた。▼新刊には『都市の住まい』（平井聖・本間博文）『人間を考える』（祖父江孝男）『社会調査法』

（盛山和夫・近藤博之・岩永雅也）『哲学的人間学』（坂本百大）『現代中小企業論』（瀧澤菊太郎）『統計的決定』（松原望）『美と芸術の理論』（青山昌文）『アメリカ論―北アメリカ』（有賀貞）『日本近代史』（鳥海靖）『光と電磁場』（阿部龍蔵）

『成人の健康科学』（鬼頭昭三）その他、力作がズラリ。▼放送大学ビデオ教材も各県の教育委員会や大学図書館などを対象に快調の売行きをみせている。

明星大学出版部

『中国語基本語用例辞典』 郝玉純 監修

本書は、『中国語基本語用例辞典』と書名がついている通り、中国語を学習する人びと、特に初級者のために作られた辞典である。内容は、用法を中心に、基本的な中国語の用法、特に動詞の用法を詳しく記述し、頻出する基本語二〇〇〇語を収めた。

大学出版部 ニュース

名古屋大学出版会

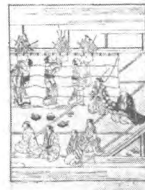
▼田中正明著『日本湖沼誌ープランクトンから見た富栄養化の現状』(定価一五四〇円) プラントン相と水質を中心に、全国の天然湖沼を踏査した記録である本書は、日本湖沼の現況を伝えるのみならず、今後の環境保全やその有効利用を進めて行く上でも不可欠の基礎資料を提供するであろう。

主たる語義、用例は必要に応じて適宜に文法的解説を掲げ、初学者が学習上困難を感じる補語

副詞、助字については提出の仕方、解説等に新工夫を施してある。また、用例にはピンインをふし、訳語を掲げ、日本語と中国語の対照法(省名と省会、少数民族、度量衡等)の付録がつけられている。
〈B5版、五五六ページ、四月下旬刊行予定〉

早稲田大学出版部

▼『早稲田大学蔵資料影印叢書 国書篇』第三期(全16巻、定価各一八〇〇〇円)の刊行を開始した。好評を得た第一・二期(全32巻)に引き続き、国文学、国



京都大学学術出版会

シリーズ「生態学ライブラリ」地球環境問題がクローズアップされる中、転回点に立つ生態学の最もヴィヴィッドな現場レポートを一般読者にもわかり易く紹介。第一集『個性の生態学ー動物の個性から群集へ』(片野修著、既刊)は個性・個体差から現実の生物世界を照射した新しい試み。これは「新しい生態学を創る

語学、演劇等に関する貴重資料を公開する。3月より三か月ごとに一巻ずつ配本。呈内容案内

▼『早稲田大学蔵第二次復刻版』(全13巻、全巻揃定価六五万円)は毎月20日に巻数順に配本中。既刊七巻、島村抱月時代の『早稲田文学』(第二次)明治39年(大正7年)全一五七冊の本文・口絵・広告等を復刻。全巻完結に際し「総目次・解説」他を進呈。菊判並製、各巻映入り。分売はいたしません。呈内容案内

ことに他ならない。著者がこの目標に向かって、着実に歩を進めつつあることが予感される。

著者の志を感じさせる格調高い本(『産経新聞』)。一般読者にも好評で、シリーズ全体への問合せも目立つ。第二集『雪氷の生態学』(幸島司郎著、近刊)では水河や雪渓などの雪氷圏の特異な生物世界全体を紹介、第三集『中国東湖生態系』(三浦泰蔵著、近刊)は湖沼系生物間のトップダウン・アプローチの予定。

大阪経済法科大学出版部

◆大阪経済法科大学所蔵『間島総領事館関係史料・広東総領事館関係史料・鉄嶺領事館関係史料』A5版・上下巻二二〇〇頁。

敗戦の混乱期、巻をさまよった在外公館の外交機密文書を、奇しくも本学の入手するところとなった。満州事変前夜の公電、機密文書を含む実に貴重な外交文書であり、外務省にも所蔵

大学出版部 ニュース

九州大学出版会

▼井口潔著『心の行脚―人間科学への道―』二五〇〇円。モーツァルトをこよなく愛する、かつての外科学教授の科学と人間についての思索。▼前田重治著『低徊派』二五〇〇円。精神分析医が臨床と研究の合間にかいまみせた素顔―「表題を夏目漱石の言う『低徊趣味』から取ったように、ちよっぴりシャイで

されていない歴史的史料を公開し、日本帝国主義時代の軍官一体化した侵略史の情報公開を目指すものである。中でも、間島総領事館、伊地知書記官による「間島事情概要・延吉県地区村制実施延期・間島視察独逸人来往・在満朝鮮人状況・昭和四年在満朝鮮人に関する調査書」等は、反日、独立を画する朝鮮人達の動向探知の状況収集を知ることのできる記録文書である。史家の垂涎の書となるであろう。

遊び心があふれている(西日本新聞)。▼村山正治・見藤隆子・野島一彦・渡辺忠編著『エンカウンター・グループから学ぶ―新しい人間関係の探求―』二五七五円。「他者との出会い」を通して「自分との出会い」であることの諸相を具体的事例に即して明らかにする。▼既刊『幻景のロシア』(清水孝純著・三〇九〇円)。ロシアの深層理解への重要な視点を提供する、愛と洞察に満ちた必読の書。

関西大学出版部

▼高森八郎著『法律行為論の研究』(定価七〇〇〇円) 前著『法律行為論上の基本的諸問題』に著書の代表作「和解の基礎に関する錯誤」のほか、「損害賠償と示談の拘束力」などを収め、大幅に増補改訂したものである。前著同様、著者独自の視点により判例・学説の問題点を明らかにし、比較法的見地か

らしても具体的に妥当な結論の導入を図っている。法律行為論の多面的考察を行った著者の代表作。▼堀正人著『雲山抄』(定価三〇〇〇円) 本学名誉教授である著者の米寿を賀し、知友や門下が相寄って献呈すべく編まれたものである。著者の専門分野の論文を除く隨筆・詩歌など、珠玉の名編が幅広く集められており、英文学・比較文学の泰斗が綴ったそれぞれの作品は、一読に値する。

自著を語る

『東京大学出版会 四十年の歩み』A5判416頁、東京大学出版会、非売品
一九五一年創立の小会の一十周年を記念して作成された冊子。石井和夫と斎藤至弘が執筆した各年の寸描や、巻末の四二二点に及ぶ刊行書目一覧は、小会の歴史が時代の

刻印をはっきりと受けてきたことを印象づける。

初期の『きけわだつみのこえ』『日本における資本主義の発達』のころから、現在の『Pascal』による算法定論』『認知科学選書』へと、書名にも時代の加速度的変化が感じられ、五十周年(二二世紀)に向けて決意を新たにす。

新刊案内 '91・12 / '92・3

(表示価格は税込みです)

■北海道大学図書刊行会

新版 北海道の鳥

竹田津 実・小川 巖 一八五四円

ニホンカモシカの解剖図説

杉村 誠・鈴木 義孝 一四四二〇円

アメリカの環境保護法

島山 武道 五九七四円

支配株主の責任と少数者株主の保護

藤原 雄三 四六三五円

現代宇宙論を読む

池内 了 一六四八円

Thorny Path to the Post-Perestroika World

六一八〇円

北海道大学付属スラブ研究センター編

Endocrine Chronobiology

広重 力・藤本 征一郎編 一〇三〇〇円

■慶應通信

近代日本社会調査史(II)

川合 隆男編 三五〇二円

経済史叢 92

渡辺 國廣編 四七〇〇円

アジア・太平洋経済圏の新時代

慶應義塾大学地域研究センター編 一二〇〇円

刑事手続とコンピュータ犯罪へ慶應義塾大学法学研究会叢書52

安富 潔 四九四四円

安富 潔 四九四四円

韓国民事法の現代的諸問題

金 晴洙・石川 明編 六八〇〇円

ホーフマンスタールの青春―夢幻の世界から実在へ―

五五六二円

〈慶應義塾大学法学研究会叢書別冊〉小名木栄三郎

ウイリアム・クーパー詩集―「課題」と短編詩―へ慶應義塾大学法学研究会叢書別冊

ウイリアム・クーパー／林英二訳 五五五九円

■産能大学出版部

「心豊かに」生きる知恵

板橋 興宗 一六〇〇円

税金対策のすべて〈平成四年度版〉

東 勇幸 一六〇〇円

スーパーカンパニーの社長学

新津 政博 一五〇〇円

ディベロップ・ザ・感性

小林 安 一八〇〇円

OAのすべてがすぐわかる本

菅野 英治 一八〇〇円

マクロ版1・2・3会計

谷田 英男／谷田 浩志 三二〇〇円

リーダー感性と問題解決

高岡 正 一五〇〇円

パソコンデータ活用法

青木 シゲル 一八〇〇円

本田宗一郎の経営学

北岡 俊明 一五〇〇円

建設業の生産性アップと利益倍増戦略

中谷 義昭 一八〇〇円

人間のころろを探る

小口 忠彦 二八〇〇円

韓国の流通産業

大久保 孝 二五〇〇円

社徳が問われる時代

佐藤 忠 一五〇〇円

マネジメント・アセスメント

徳丸 満夫 三〇〇〇円

成功する人脈づくり

阪本 亮一 一三八〇円

■玉川大学出版部

メンデルと遺伝〈原図で見る科学の天才〉

W・ジョージ／片岡勝美訳 一五四五円

ガリレオと近代科学の誕生〈原図で見る科学の天才〉

M・サジェット／大橋一利訳 一五四五円

ステイアブソンと蒸気機関車〈原図で見る科学の天才〉

C・C・ドーマン／前田清志訳 一五四五円

エリートなんかもういらぬ
歴史のなかの旅人たち
国際文化学と英語教育

浜田 正秀 二二六六円
岡田 喜秋 二二六六円
阿部美哉編 三二九六円
玉川学園編 一八五四円
玉川学園編 一八五四円
玉川学園編 一五八四円

日本の地盤液化履歴図
日本の地盤液化地点分布図
土佐日記・紫式部日記〈桃園文庫影印叢書〉

若松加寿江 三九一四〇円
若松加寿江 一二三六〇円
村瀬敏夫解題 二〇六〇〇円

心をきたえる道徳教室 低学年
心をきたえる道徳教室 中学年
心をきたえる道徳教室 高学年
ナチ弾圧下の哲学者―リヒャルト・クローナーの軌跡

W・アスマス／島田四郎・福井一光訳 二八八四円
小川 信夫 一八五四円

植物の個体群生態学 第2版
J・W・シルバータウン／河野・高田・大原訳
導波伝送基礎理論
哲学者の誕生 デカルト初期思想の研究
日本産カミキリムシ検索図説

東海大学病院超音波検査室編 五五六二円
松田 静男 四六三五円
石井 忠厚 六六九五円
小林延夫・佐藤正孝・小島圭三編 一八五四〇円
伊藤嘉昭編 三二九六円
太田 需・長江 彰ほか 二七八一円

■中央大学出版部

構造的暴力と平和 J・ガルトウング／高柳先男他訳 二四七二円
日本の失業行動 水野 朝夫 六一八〇円
五・四運動の虚像と実像―一九一九年五月四日 齋藤 道彦 三〇九〇円

企業の内側―階層制の経済学―
H・ライベンシュタイン／鮎沢成男・村田 稔監訳 三二九六円

新渡戸稲造―国際主義の開拓者―
ジョージ・オオシロ 三〇九〇円

増補 ユートピアへの接近―社会思想的アプローチ―
田村 秀夫 二二六六円

東海大学出版会
自然とのふれあい半世紀余 淵 秀隆 一〇三〇〇円
日本語初級― 東海大学留学生教育センター編 二九八七円
In Search of the Culture of Denmark 松前 重義 三〇九〇円
GEOTHERMY 早川正巳ほか 一三三六〇円
徒然草―〈桃園文庫影印叢書〉

東京大学出版会
都市へ東京大学公開講座54 有馬朗人編集代表 二二六六円
生命の誕生へ講座進化5 柴谷篤弘・長野敬・養老孟司編 二四七二円
西洋教育史〔第二版〕 長尾十三二 三九一四円
政策型思考と政治 松下 圭一 三九一四円
日本の経済 館 龍一郎 二二六六円
日本における産業民主主義の前提 佐口 和郎 六五九二円
主体性と所有構造の理論 吉田 民人 四九四四円
外国人労働者と社会保障 社会保障研究所編 四二二〇円
T系ファージ〈UPパイオロジー90〉 皆川 貞一 一六四八円
Carionopathy Update 4 関口守衛ほか 二〇六〇〇円

蟹江秀明・鍛冶光雄解題 二五七五〇円

新刊案内

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和編21

国立国会図書館所蔵 一三三六〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和編21

国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

現代日本社会6 問題の諸相

東京大学社会科学研究所編 四七三八円

分子からみた進化へ講座進化6

柴谷篤弘・長野敬・養老孟司編 二四七二円

近代日本中学校制度の確立

米田 俊彦 六六九五円

大正デモクラシー体制の崩壊

酒井 哲哉 五一五〇円

戦争と国際システム

山本吉宣・田中明彦編 七〇〇四円

地球システム科学入門

鹿園 直建 二八八四円

Theoretical Tunnel Mechanics

松本嘉司・西岡隆 八四四八円

Women of the Mito Domain

山川菊栄著/ケイト・ナカイ訳 四二二〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和編22

国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和編22

国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

明清社会経済史研究

小山 正明 一四四二〇円

フランス中世政治権力構造の研究

渡辺 節夫 一〇〇九四円

農村社会の変貌と農民意識

高橋明善・蓮見音彦・山本英治編 九四七六円

身体運動科学〔保健体育講義資料第二版〕

東京大学教養学部保健体育研究室編 二二六六円

Cによる算法通論

森口繁一・伊理正夫・武市正人編 二二六六円

Pascalプログラミング〔第二版〕

永野三郎・長島忍・吉村伸 二二六九円

グローバル気象学へ気象の教室へ

廣田 勇 二四七二円

反射望遠鏡

山下 泰正 六一八〇円

日本猿の解剖図譜

牧田 登之 一〇三〇〇円

Photographic Atlas of an Accretionary Prism

平朝彦・Timothy Byrne・芦寿一郎 一〇三〇〇円

Chemistry and Spectroscopy of Interstellar Molecules

D. K. Bohme・E. Herbst・海部宣男・斉藤修二編 一三三六〇円

Japan's Foreign Investment and Asian Economic Interdependence

徳永正二郎編 七四一六円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和編23

国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和編23

国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

現代日本社会3 国際比較(2)

東京大学社会科学研究所編 四五三二円

ヨーロッパ社会思想史

山脇 直司 二二六六円

心理検査 TATかわり分析

山本 和郎 三五〇二円

アメリカ冷戦政策と国連 1945-1950

西崎 文子 四九四四円

統計力学〔第二版〕

阿部 龍蔵 三二九六円

数値流体力学

保原充・大宮司久明編 一八五四〇円

International Carrels in Business History

工藤章・原輝史編 七〇〇四円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇24

国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇24

国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

■東京電機大学出版局

第二種情報処理試験全問題解答集〔92春季版〕

二五七五円

特殊情報処理試験の徹底研究〔92年版〕

日本ユニシス情報処理システム研究会編 二五七五円

無線従事者試験問題の徹底研究へ1陸技・2陸技・1総通・2総通

〔予備試験〕

松原孝之 三〇九〇円

改訂 物理学〔理工学講座〕

青野朋義・阿部陽一・尾林見郎・加瀬邦夫・木下彬 三五〇二円

教養 流れの力学(下)―流れの科学―

増補版 わかりやすい上水道と給水装置 榮森康治郎 二六七八円

英語発音十活用語彙上達法―コンピュータ音声波形を利用して―

川辺俊一・小谷悠紀子 二五七五円

図解 ISDNの利用へISDN技術シリーズ

都丸敬介 一八五四円

図解 ISDNの伝送技術と信号技術へISDN技術シリーズ

津田達・津田俊隆・遠藤一美 二二六六円

図解 ISDNの端末技術へISDN技術シリーズ

高木浩一・山田勝三・吉田哲雄・藤崎貞憲・清水智 二四七二円

ハイテク選書ワイド 未来をひらく水素自動車

古濱 庄一 一六四八円

新情報テキスト システム設計

鈴木 洋光 二五七五円

マイコンシステム技術者試験の徹底研究

柏谷英一・中村陽一・浅野健一・金野雅章 二五七五円

情報科学セミナー アルゴリズム論―理論と実際―

G・ブラッサール&P・ブラットレイ／足立暁生訳 四八〇〇円

無線工学Aへ2陸技1・2総通受験教室 ③秋富 勝 二四七二円

■東京農業大学出版会

畑作営農集団の展開過程

―北海道南網走営農集団の実証的研究―

新沼 勝利 三六〇〇円

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局

神の思想と人間の自由

W・パネンベルク／座小田豊・諸岡道比古訳 二〇六〇円

モーツァルト―ある天才の社会学―

N・エリアス／青木隆嘉訳 一八五四円

参加と距離化―知識社会学論考―

N・エリアス／波田節夫・道旗泰三訳 二四七二円

二十世紀からの脱出

E・モラン／秋枝茂夫訳 三九一四円

フッサール現象学の直感理論

E・レヴィナス／佐藤真理人・桑野耕三訳 四九四四円

琉球弧の文学―大城立裕の世界―

板東俘虜収容所―日独戦争と在日ドイツ俘虜―

里原 昭 一三三九円

トブカプ宮殿の光と影

N・M・ペンザル／岩永 博訳 三九一四円

小倉金之助―生涯とその時代―

阿部 博行 二九八七円

ハイデッガー研究―思惟の道―
習俗の始原をたずねて
始まりの現象―意図と方法―
E・W・サイード／山形和美・小林昌夫訳 五九七四円
再生の女神セドナー―あるいは生への愛―
H・P・デュル／原 研二訳 四八四一円

芸術と疎外―社会における芸術家の役割―
H・リード／増渕正史訳 三〇九〇円
ラディカル・ユートピア―価値をめぐる議論の思想と方法―
A・ヘラー／小箕俊介訳 二四七二円

南島説話の研究―日本昔話の原風景―
◎日本生命財団出版助成図書 福田 晃 八二四〇円
無限の二重化

―ロマン主義・ベンヤミン・デリダにおける絶対的自己反省理論―
W・メニングハウス／伊藤秀一訳 三三九九円
日本近世の都市と建築 野口 徹 七二七五円

日本の企業経営―歴史的考察― 一寸木俊昭 三八一円
パフチン以後―ヘポリフォニー―としての小説―
D・ロッジ／伊藤 誓訳 三六〇五円

十八世紀の文人科学者たち
W・レベニス／小川さくえ訳 一九五七円
生きものの迷路―空間・行動のマチエール―
A・モール&E・ロメル／古田幸男訳 二二六六円

科学的理性批判 K・ヒュプナー／神野・中才・熊谷訳 四四二九円
続・いま、ここで
―アウシュヴィッツとヒロシマ以後の哲学的考察―
G・ピヒト／斎藤義一監修・大野・福島・浅野訳 四九四四円

パルメニデス―断片の研究―

K・ボルマン／日下部吉信訳 九九九一円
雑誌・哲学・42号―特集*存在論の基礎づけ―
雑誌・同時代・58号 日本哲学会編 一五四五円

日本社会運動史料―機関紙誌篇 農民運動(2) 黒の会 編 一〇三〇円
法政大学大原社会問題研究所編 一四九三五円

■放送大学教育振興会(〇印はビデオ・ソフト)
老年期の健康科学 鬼頭昭三編著 一九六〇円
都市の住まい 平井聖・本間博文編著 一七五〇円

家庭の経済―家計と市場をめぐるひとつの解釈― 坂井 素思 一六五〇円
衣生活論―衣生活の検証― 五十嵐脩・今井悦子編著 一七五〇円

食物の科学 酒井豊子編著 一七五〇円
成人の健康科学 鬼頭昭三編著 一七五〇円
高齢化社会の生活と福祉 鬼頭昭三・本間博文編著 三〇九〇円

学習心理学―学習活動の基礎過程― 金城辰夫編著 一七五〇円
認知心理学 小谷津孝明・星薫編著 二一六〇円
カウンセリング(改訂版) 佐治 守夫 一九六〇円

青年の心理と教育 久世敏雄編著 一九六〇円
子供の世界 宮澤康人・星薫編著 四七四〇円
政治学入門(改訂版) 阿部齊・中野勝郎 一六五〇円

経済学入門(改訂版) 嘉治 元郎 一二四〇円
経済思想―市場社会の変容― 間宮陽介編著 一六五〇円
近代性の社会学―構造とゆらぎの視点から― 厚東洋輔・今田高俊 一六五〇円

社会調査法 盛山和夫・近藤博之・岩永雅也 二〇六〇円
日本人の生活と文化―その生活技術をたずねて― 須藤 護編著 一九六〇円

○物質工学の世界

○基礎電子工学

○土木工学

○文化人類学

○近現代の東南アジア

○博物館学Ⅱ

○固体地球

○日本列島の地球科学

○宇宙像の変遷

○現代資源論

○衣生活の科学

○教育の歴史

○パソナリティ論

〔特別講義ビデオ教材ⅡVHS全1巻45分
いずれも定価二〇〇〇〇円〕

○酒造りの歴史と技術 (1)伊丹酒の時代

○酒造りの歴史と技術 (2)灘酒の時代

○道の文化史 (1)近世街道の成立

○道の文化史 (2)庶民の旅

○教育の国際化

○イギリスと日本文化

○魚とりの文化—南太平洋の漁撈と海の民—

○発達と脳波

○情報通信技術の歩み (1)のろしから再び光へ

○情報通信技術の歩み (2)光・衛生・ディジタル

○砂漠の緑化

○熱帯多雨林の生態

○生体統御の秘密—神経系と免疫系の共闘—

○鉛で探る日本の青銅文化

瀧口利夫・東 千秋

小川鑑一

中村英夫

祖父江孝男

和田正彦

大塚和義・矢島國雄

奈須紀幸

濱田隆士

村上陽一郎

山口梅太郎

酒井豊子

石川松太郎

佐治守夫・飯長喜一郎

柚木 学

渡辺 信夫

渡辺 信夫

秋道 智弥

伊沢 秀而

熊谷 信昭

熊谷 信昭

遠山 征雄

荻野 和彦

井形 昭弘

馬淵 久夫

○フロンによるオゾン層破壊

○太陽エネルギーを利用する

○集合の住いを考える

○触媒の不思議

〔教師教育ビデオ教材—いずれも放送教育開発センター編
印刷教材10冊をふくみ定価各一九〇〇〇円〕

○教育の方法及び技術—新しい教育の創造— (35分)

○教育の方法及び技術—授業の仕組みと働き— (35分)

○教育の方法及び技術—授業を創る— (35分)

○教育の方法及び技術—教育メディア— (30分)

○教育の方法及び技術—黒板・カード・OHPの活用— (40分)

○教育の方法及び技術—コンピュータ技術と教育— (25分)

○教育の方法及び技術—教師を助けるコンピュータ— (35分)

○教育の方法及び技術—映像教材の制作— (30分)

■明星大学出版社

■早稲田大学出版社

近代日本と早稲田大学

シュンペーター・企業行動・経済変動

経済理論と計量分析

マルカタ南Vインス神殿北西部の遺構と遺物—

早稲田大学古代エジプト調査委員会編 一六四八〇円

BIOTELEMETRY XI 内山明彦他編 六〇〇〇円

現代政党学—政党システム論の分析枠組み—〔新装版〕

G・サルトーリ／岡沢憲美・川野秀之訳 四二〇〇円

わたしたちの源氏物語—平安の女君と平成の母親たち—

中野幸一編 二五〇〇円

エピソード稲門の群像 125話 奥島孝康・中村尚美監修 二〇〇〇円

富永 健一

坪村 宏

鈴木 成文

田部 浩三

早稲田大学蔵資料影印叢書

第32巻 近世古文書集 滝沢武雄編 一五四五〇円

第46巻 朱筆書入れ江戸芝居絵本番付集(一) 鳥越文蔵・菊池明・林京平編 一八〇〇〇円

早稲田文学〈第二次〉復刻版 全13巻 全巻揃六五〇〇〇円

第3巻 (明治41年1月号〜12月号) 分売不可

第4巻 (明治42年1月号〜12月号) 分売不可

第5巻 (明治43年1月号〜12月号) 分売不可

第6巻 (明治44年1月号〜12月号) 分売不可

■名古屋大学出版部会

日本湖沼誌―プランクトンから見た富栄養化の現状―

田中正明 一五四五〇円

山本 有造 六一八〇円

国際社会学―国家を超える現象をどうとらえるか―

梶田孝道編 二八八四円

カント批判哲学の研究―統覚中心の解釈からの転換―

黒積 俊夫 六一八〇円

パスカル 直観から断定まで―物理論文完成への道程―

小柳 公代 九七八五円

教育近代化の諸相 江藤恭二監修／篠田・鈴木編 八二四〇円

■京都大学学術出版会

■大阪経済法科大学出版部

河内地域史―総論編― 村川行弘・小林博編著 二八八四円

戦争と平和の黙示録 上林貞治郎著 二〇〇〇円

■関西大学出版部

法律行為論の研究 角山 幸洋 八五〇〇円

■九州大学出版会

心の行脚―人間科学への道― 井口 潔 二五〇〇円

企業競争と経営戦略〈経済工学シリーズ〉 岡部 鐵男 三六〇五円

危険性と刑事司法

J・フロウド&W・ヤング／井上祐司訳 四六三五円

エンカウンター・グループから学び―新しい人間関係の探求―

村山正治・見藤隆子・野島一彦・渡辺 忠編著 二五七五円

精神分析のメタ心理学 大村 敏輔 五一五〇円

低徊派 前田 重治 二五〇〇円

M・ブロンデルと近代的思惟 増永 洋三 六六九五円

カント二元論哲学の再検討 岩隈 敏 五六六五円

戦後日本教育財政制度の研究 小川 正人 五六六五円

八幡宮の建築 土田 充義 一〇三〇〇円

Andre Gide, *Le Retour de l'Enfant prodigue*. Edition critique 吉井 亮雄 八七五五円

The Medieval Latin Traditions of Euclid's *Catoptrica* 高橋 憲一 一〇三〇〇円

明治国家初期財政政策と地域社会 長野 暹 六六九五円

西欧中世慣習法文書の研究―「自由と自治」をめぐる都市と農村― 齋藤 綱子 七二一〇円

▼坂井洲二『ドイツ人の老後』という本を担当した。この本によれば、ドイツでは自分が死んだあとの墓の世話まで、子供たちとの間に契約書を取りかわすという。日本人の感覚からすれば、いささか気の滅入る話ではある。もちろん著者は、ドイツの習慣や制度を、全面的によしとするわけではないが、いずれ日本にもそうした時代が来る、後でのごたごたするより、きちんとした契約があった方がよいということを、こうした例をあげて説いているのだ。それがフロッピーと何の関係があるのか、と思われるかも知れないが、ないこともない。ただし、今回は印刷所のフロッピーの話。

▼活版印刷から電算・オフに変わって、紙型に相当するのは原版、つまりフィルムである。だから、フィルムに関してはどこかの印刷所でも、紙型に準じた管理のシステムができて上がっているようだ。ところが、フロッピーについてきいてみると、これが何とも頼りない。特に指示されなければ保管しないとか、

一定期間しか保管しないという所もあるようだ。保管するにしても、バックアップをとっているケースはほとんどない。

▼いったん本が刊行されてしまえばフロッピーを利用することはめったにないから、今のところはこれで済んでいる。しかし将来的に、象眼では処理しきれない大改訂を行なうとか、シリーズの総索引を作るとか、何

●製作の現場から フロッピーは 誰のもの？

冊かの本を編成替えして全集に組み直すとかいうことになれば、フロッピーがあるとないでは大変な違いが生じる。費用の面でもそうだが、作業量がまるで違ってくるはずだ。

▼印刷所の立場からすれば、活版の時代と同様のサービスを既に提供している、ということになるのだから、組版のシステムが変われば、管理すべきもの

も変わってくる。活版の紙型はオフのフィルムに相当する、と書いたが、実のところ、異なるシステムを部分的にイコールでつなげるのは、説明には便利であったもいささか問題がある。電算写植を利用するということは、そのシステムによる組版・印刷サービス、システムの可能性を含めて購入ということなのだ。その意味で、フィルムとフロッピーとは、セットで考えられ、セットで管理されるべきものだろう。

▼そこで契約の話になる。印刷所との契約といえば、組版代・印刷代の話に終始するのが通例だが、それだけでは今後に問題を残す。フロッピーの所有権はどこにあるのか、どのように管理するのかというところを含め、事故処理の問題から、細かいところでは校正刷の図版は誰が貼り込むのかといったことまで、きっちりとした契約をしておくことが、結果的には組版代の十銭や二十銭の違いよりも大きな意味をもってくるはずだ。

▼電算写植の開発・活版からの

移行は、大手の出版社はいざ知らず、大方の中小出版社にとっては無縁のところで行なわれてきた。いわば外圧である。そのため未だに、活版と同じことができればそれでよし、とする考え方が強い。しかしそろそろ考え方を變えて、電算写植ならではの利用法を考えると同時に、出版社の側からの注文を出していく時がきているように思う。

▼そしてついでに、契約の苦手な日本人・とりわけ苦手な出版人・中でも苦手な編集者という図式からも脱却したいものだ。

(ほの字)

●編集後記

「大学出版」14号をお届けします。創刊以来六年、当初は年二回、12号からは年三回の刊行となりましたが、その間、協会員各位のご意見も取り入れ、読みたくなる、書きたくなる冊子をめざして編集部会員一同努力してまいりました。今後とも協会の内外を問わず、より一層のご意見・ご批判をいただければ幸いです。

(W)

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
慶應通信	〒108 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3451-3122
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 0427-28-3213 FAX 0427-28-3218
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒160 東京都新宿区新宿3-27-4 新宿東海ビル TEL. 03-3356-1541 FAX 03-3341-1833
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-3291-9665 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-3420-2131 FAX 03-3706-8851(総務課)
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒102 東京都千代田区富士見2-17-1 TEL. 03-3237-1731 FAX 03-3237-8899
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル4F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 0425-91-5115 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市中種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172

大学出版(第14号)92春 平成4年5月1日発行 発行者 大学出版部協会

〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円(本体97円)千共